

2018年度北海道大谷学園連合会  
高等学校相互評価報告書

対象校 稚内大谷高等学校



評価校：帯广大谷高等学校  
(実施日：2018年11月8日)

2019年3月31日

北海道大谷学園連合会相互評価委員会

## 北海道大谷学園連合会相互評価委員会

主査	中西 猛雄（北海道教区大谷学園委員会委員）
委員	堀 武（北海道教区大谷学園委員会委員、元北海道学事課長）
委員	金石 潤導（真宗大谷派北海道教区教化本部長）
委員	種市 政己（札幌大谷高等学校長）
委員	大西 正宏（帯广大谷高等学校長）
委員	竹本 将人（北海道大谷室蘭高等学校長）
委員	富原加奈子（札幌大谷高等学校教頭）
委員	高野 敏彦（札幌大谷高等学校事務長）

## 稚内大谷高等学校の概要

設置者	学校法人 稚内大谷学園
理事長名	吉田 幸麿
校長名	山下 優
開設年月日	昭和38年2月28日
所在地	稚内市富岡1丁目1番1号
設置学科	普通科
入学定員	各学年90名 270名
教職員数	（総数）27名 （常勤）24名 （非常勤）3名

## 評価結果

### (1) 建学の精神・教育理念

建学の精神・教育理念については、生徒に対して原則毎週月曜日に建学の精神や教育理念の話をしているなど、宗教教育の時間を多く取っており、1年生の夏休み前までには、生徒全員が三誓偈を唱えることができるようになっている。このように、建学の精神に基づいた教育が徹底されている点が評価できる。

### (2) 教育課程・学習指導

教育課程・学習指導については、各教科で年間指導計画および月間指導計画を作成し、計画的に授業を展開または修正を加えて行っていることと、来校する中学生・保護者・引率教員に指導計画を配布し、授業の展開や難易度を説明している点が評価できる。

また、生徒・保護者のアンケート結果を各教科で分析し、次年度の授業改善に活かしている点や稚内北星学園大学と高大連携協定を結び授業を展開している点も評価できる。

i P a d 4 0 台設置、学習デジタルコンテンツ C l a s s i を導入するなど、次期学習指導要領を見据えた ICT 環境の整備を進めている点も評価できる。

今後に向けて、限られた教員数の中で難しい面もあるが、普通科目においても教育課程で公立高校との差別化を図っていく必要がある。また、今後の文科省の動向を見ながら、①高等学校基礎学力テスト導入に伴う教育課程の変更、②大学入学希望者学力評価テスト導入に伴う教育課程の変更、③学習指導要領改訂に伴う教育課程の変更の検討が必要であると思われる。

### (3) 生徒指導・部活動

生徒指導については、全教職員が共通理解のもと、一丸となって行っており、今年度の指導処置（停学・退学）がほとんどない。日常の生活指導が徹底している点が評価できる。また、各学級の保護者が生活指導モニターとなり、家庭・地域から見た大谷高校について意見をのべ、学校－家庭－地域が連携して生徒の指導・学校づくりを行っている点も評価できる。その他、一般入試直後、面接で問題を感じた受験生の中学校に教頭先生と入試部長が話を聞きに行き、入学後の生徒対応を検討している点も評価できる。

部活動については、強化クラブを中心として活発に行われている他、難関大学を目指す生徒のための進学クラブ(大谷塾)も部活動の位置づけで実施されている。通常授業＋部活動でさらに有意義な高校生活を送れる点が評価で

きる。また、高体連からの通知のとおり、疲労防止等のために週1回の休みを設けている点や仕事の効率化を目的として教職員の時間外勤務ゼロの日を設けている点も評価できる。今後も文科省の動向を注視しながら部活動のあり方について検討していく必要があると思われる。

#### (4) 進路指導

進路指導については、推薦進学の子供25名に対して、現有教員の他に、札幌大谷大学の教授の小論文指導(年間3回)を受けている。少ない教員数の中、系列校の大学の先生と連携して進路指導を行っている点が評価できる。

外部講師を招いてのキャリア教育、レディネステスト、就職ガイダンス、進学相談会、卒業生講話、職業意識形成セミナー、職業別ガイダンス、職安ガイダンス、インターンシップ(職業体験)など、働くことの意義、職業観を養う取り組みを数多く行っている。また、放課後に様々な資格取得のための授業・講習を行い、それが就職活動に活かされている点が評価できる。また、地元企業を大切にしていることから企業との繋がりが非常に強く、それが良い学校評価につながっているという点も評価できる。以上のことが、進路決定率100%達成につながっていると思われる。

#### (5) 財務

財務運営については、地元中卒者の動向を把握し、「中期的入学生徒募集計画書」並びに「中期的資金計画書」に基づき共通認識が図られている。

収入の要となる生徒数については、定員を満了し、平成29年度においても90名の入学者となっている。このことは全教職員挙げて継続的に行われてきた生徒募集活動の成果と言える。

学校法人の収益性を示す帰属収支差額は、平成29年度においてもプラスを計上している。平成27年度は校舎移転事業によりマイナスを計上しているが、特別事業によるものであり、経常的には経費削減努力等により概ね堅調に推移していると言える。

平成36年度まで借入金の返済を予定しているため、中卒者の減と相まって、より慎重な財務計画の策定と着実な実施が必要と思われるが、一方でより一層の教育効果向上のためには、財政的な投資が必要な場面も出てくることが想定される。今後は、短期的・中期的な視点に加え、地域ニーズの的確な把握や、費用対効果の検討等、多角的な視点からの検討がこれまでも増して重要となると言える。

以上、今回、稚内大谷高等学校の教育活動や財務につきまして評価をさせて

いただきましたが、逆に本校として多くのことを学ぶ機会となりました。今後の教育活動の参考にさせていただきたいと存じます。山下校長先生をはじめ、ご対応いただきました越後屋教頭先生、教職員の皆様には、多くのご助言をいただき、誠にありがとうございました。衷心より感謝申し上げます。

以 上